

Yasuhiro Nakagaki

ワーカーホリックなどと言われながらも、滅私奉公すれば、会社が一生めんどうを見てくれる。そう信じていた時代はもはや過去のものとなった。

右肩上がりの成長からデフレへの転落。

そのあおりを最も受けているのは、

パラダイムシフトの真ただ中にある中高年サラリーマンではないだろうか。

どうしたら幸せな明日が見えてくるのか。そもそも幸せとは何か。

山田洋次氏と、河合隼雄氏が中高年の心の癒しについて語り合う。

自信を失ったときこそ、 本当の幸せが 見えてくるものです

ほ っとできる 映画の終わり方

河合 山田さんがお撮りになった「たそがれ清兵衛」が中高年の共感を呼んでいるようですが、私も早速拝見させていただきます。

山田 それはどうもありがとうございます。

河合 とても感激しましたので、小泉総理にも「ぜひ見に行かれたらどうですか」とお勧めしたんです。私は文化庁の方と一しょに見に行つたのですが、実はその彼と映画の終わり方をめぐって意見が分かれたのです。彼が言うには「果たし合いに打ち勝ち、やっと思いを寄せる女性と結婚できるというあのクライマックスで終わるほうがいい」と言うのです。

山田 確かにそういう意見もありました。

河合 でも僕は作品のとおり、家族の行く末まで描いて終わるほうがいいと思います。なぜなら、映画館というのは非日常的な世界ですから、観客には感激の余韻を味わいながら現実へと帰っていただくのがいちばんいいと思うからです。それが礼儀だと思うので、終わり方はあれでよかったのだと思います。後日、総理からも「いい映画だったよ」とお電話をいただいたのですが、終わり方

については総理も同じ意見でした。山田 昨年「く」になった柳家小さん師匠は「寅さん」の映画をよく見てくれたんですが、「いつも最後がいいね」と言ってくれたことがあります。

寅さんは必ず失恋して、柴又の町をしょんぼり去るわけですが、「普通はそのさみしい後姿でエンドマークを出すところだけど、あなたの場合は、半年後にけるっとしてバカなことをやってる寅さんで終わる。それがお客はほっとして帰る、酒を飲んでも早く酔える。それが親切というもんですよ」と、そんなことを。

河合「たそがれ清兵衛」の最後についてはもう一つ理由があるのです。もしクライマックスで終わっていたら息子といっしょだった場合、親父が泣いている姿を見せることになって示しがつかない。だからちゃんと涙をふく時間も必要なんだと（笑）。

山田 でも終わり方に関しては、丁寧すぎたかもしれませんね。ああいうの、僕の癖なんです。

組 織に生きる清兵衛に見る サラリーマンの心情

河合 中高年のお父さんたちがあの映画のどこにいちばん涙を流しているかといえは、家族の幸せのために自分の生き方を貫く姿ではないでしょうか。現代のサラリーマンは「つまあい残業」というのがあって、帰

SPECIAL TALK

山田 洋次 VS 河合 隼雄

山田 洋次 youzi yamada ■写真(左)

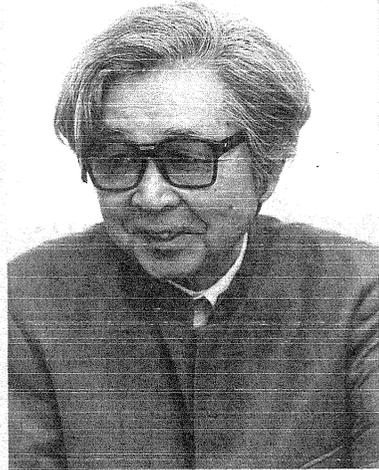
■ 映画監督

1931年大阪生まれ。55年松竹大船撮影所入社。2000年に同撮影所の歴史が閉じるまで、ここで映画を製作し続けた。主な作品として「男はつらいよ」シリーズの他「家族」「幸福の黄色いハンカチ」「息子」「学校」シリーズなど。最新作は、初の時代劇となる藤沢周平原作「たそがれ清兵衛」。

河合 隼雄 hayaō kawai ■写真(右)

■ 文化庁長官

1928年生まれ。心理学者。62年から3年間、スイスのユング研究所に留学。日本におけるユング派の心理療法を確立した。国際日本文化研究センター所長を経て、03年より文化庁長官に就任。



りたくても帰れない。その点、清兵衛は藩に仕える身でありながら、たそがれになると家族のために帰るのです。

山田 上役がまだ在社している時、「妻が風邪で寝てますので帰ります」と言える人は偉いと思います。普通はなかなか言えない。

河合 日本はもともと「お家大事」の国でしたので、「私」というのは無に等しかったわけです。時代が移り、その「お家」がなくなったら今度は「会社第一」になった。増えたと自分を失ってしまう人が増えてきたのです。ところがなんのことはない。「お家大事」の時代にしっかりと自分を持っていた人がいたのです。しかも

でいる。地に足がついているからでしょう。しかもあんまり気負いが無いのがいいですね。

山田 藤沢周平さんの小説には、そういう意味では力強い英雄的な男はほとんど登場しませんね。

河合 本当は強いんでしょうけど、山田 おっしゃるとおり。だけど、普通の男として描かれている。

河合 日本の社会というのは、ある意味そういう芯の強い普通の人によって支えられてきた社会だと思います。そういう人はいわゆる偉くなるという野心も持たず、その土地土地で芯のある人生を生きてきた。それが今の日本全体の文化を支えているのだと思います。

【安心】と「幸福」

山田 僕の感覚としてあの時代の人たちは「幸福」という考え方があったとはどうしても思えないのです。河合さんはある雑誌に、昔は「安心」という言葉があったと書いていらっしやいました。僕はなるほど思ったのですが、「安心」という言葉はあっても、「幸福」という言葉はなかったのではないのでしょうか。

河合 「幸あれ」あるいは「幸ませ」という言葉はありましたが、しかしどういふ感覚で使っていたかはわかりません。

「幸福」という言葉に関しては、本当に研究する価値があると思いません。僕たちが若いころは、「幸福論」



の生き方に訴えるものがあったのだと思います。でも、「たそがれ清兵衛」というのは、陰口から付けられた名ですよ。

山田 ええ。完全な悪口です。

河合 しかし、彼は平気

というのには、彼が平気な理由があるからでしょう。彼が平気な理由があるからでしょう。彼が平気な理由があるからでしょう。

山田 アランの「幸福論」なんて本のタイトルは非常に刺激的でしたものね。

河合 山田さんのおっしゃるとおり、昔は「安心立命」という言葉がありました。その「安心」という言葉は、死んでもあの世があるから安心ですよということを意味します。民俗学者の柳田国男さんが書いているのですが、自分の近所に住んでおられたお年寄りがあんまり感じがいいので話しかけたら「死んだら御先祖になるからと悠々としてるんだ」と言ったそうです。

山田 なるほど。僕は学生のころ、アメリカ人がエンジョイという言葉をやたらに使うので、びっくりしたものです。当時、人生をエンジョイするなどということは考えられませんでしたから。

河合 ええ。とてもジョッキングな言葉でした。アメリカではエンジョイしていいとカッコ

悪いみたいなのにみんな思っていたのですが、最近ではエンジョイすることだんだん疲れてきています。いまにはなんでエンジョイするのか腹が立ってきて、それが犯罪につながっていると言われています。

【自】私を生きるには「私の物語」を持つ

河合 人間というのはいつかは死ぬのです。だから自分が死んで残るものがないと不安なわけです。そこで日本の場合には「家」を残そうと考えたわけですね。

山田 なるほど。
河合 しかし、「家」より自分のことが大事となったとき、キリスト教には神がいるけど、日本はそれに代わるものがないのです。これが今の日本人のいちばん難しい問題だと思います。それは誰だつて、自分の思いどおりに生きたいと思うものです。しかしその一方で、何か残したい。そのときに、自分の会社が永遠に続くとしたら、身を粉にしても働きたいと思うわけです。

山田 ところが会社がつぶれる時代には、自分の仕事が残るといふわけにはいかなかった……。

河合 だから「私」ということになつてくるのだと思いますが、そこで「私の物語」を持つということが大事だと思うのです。そういうときに「たそがれ清兵衛」の物語はとても役立ちますね。

山田 確かに清兵衛の娘たちは、お父さんの物語を知っている。観客の

【家】族のきずなを「取り戻す」には

山田 自分の働く会社が倒産して、家に閉じこもってしまった男性がいます。彼が1年後に手記を書いたのです。

そこには、その間のつらい日々の思いがめんどめんどと書きつづられていたのですが、その手記を見せられた奥さんは「私のことは何も書かれていない」とがっかりして、けつぎよくそのことが引き金になって離婚したそうです。

河合 それは今の夫婦のすれ違いを表すみごとな例ですね。
山田 これまで僕たちが求めていた幸福とは、要するに家を持ち車を買いたいというような物を得ることであったんじゃないでしょうか。

河合 今は金さえあれば物を得られますからね。
山田 しかし、きりが無いわけ。でも物を実際に持つてみると、そんなに幸福ではない。もともと人が持つていけば腹は立ちますが(笑)。
山田 それより、妻や子供に信頼さ

お父さんたちは、果たしてオレには子供に残す物語があるのかなと、ハッとするかもしれません。

河合 だからこそ、これからの時代は芸術というものがものすごく大事になると思います。ビジネスマンの人にはもっと芸術に触れることをお勧めしますね。

山田 実はこんな話を聞いたことがあります。若い娘が押しかけるレストランは、彼女は信用できない。反対に、中高年のお父さんが一人で黙々と食べているレストランの味は信用できる。僕の映画も、若い人に大受けする映画ではないかもしれないが、中高年のお父さんが会社をさぼってこっそり見に来て、そっと涙をふくような映画になればいいと思ったものです。

河合 まさにそのとおりになりましてね。一方、若者の評価はどうなんですか。

山田 徐々に増えているようです。おやじが見て大学生の息子に勧めたり、あるいはおじいさんが見て40代の子供に勧めたりと、3世代にわたって見てくれるケースがあつたとか。
河合 3世代に見せて、彼等がどういふ会話をするのか聞いてみるとおもしろいかもしれませんね。

れることの方がはるかに価値があるわけ。
河合 それは、かけがえのないものですよ。

山田 白川静さんの「字通」という辞書で「幸」という字を引いたら、「幸」は「手かせ」からきているとありました。昔はたぐさんのつらい災いがあつて、それから逃れたとき「幸せ」というのです。なるほど思いました。

河合 そもそも、迷つたり、苦しんだり、悲しんだりすること自体が「幸せ」なんだということがわからないといけない。

山田 人間って、本当にめんどりでやっかいな生き物なんだということをや、まず理解することなんですよ。やこしいことだし、家族もしかり。
河合 でもそのややこしい中で一生懸命生きると、清兵衛と娘たちのような強い生き方が生まれてくるのだと思います。

【親】子の心をつなぐ会話術

山田 河合さんがある対談で、能ではワキがシテの語りかけをちゃんと聞いてくれるかどうかでシテの出来不出来が決まるとおっしゃっていたんですが、思えば温美清さんは、相手のせりふを突によく聞いてくれた

のです。ですから渥美さんと共演する役者は、みんな演技がうまく見えませんでした。

河合 それは家族にも言えるのではないですか。このころ、家族の会話が成り立たないと言われていますが、それは親がちゃんと子供の話を開いていないからです。

子供は一生懸命話しかけているのに、聞いてほしいことには耳を傾けず、「それで、昨日の試験何点だった？」ということしか言わない。その間どんな苦労があったとか、どんな気持ちだったとかは全く聞かれないですね。

山田 そういうことって、どこの親子にもありそうですね。考えてみれば、語りたいという衝動は親子の心を通わせたいという願ひなんだから。渥美さんという人は、本当に聞き上手な人でした。というより、人の話を聞くのが好きでしたね。自分がしゃべるよりも。

河合 もっと子供と会話したらおもしろいと思いませんか。それと奥さんともね。

山田 中高年のお父さんたちに家族と対話する時間のないのは事実でしょうが、たとえ短い時間でも、妻や息子の話を聞くという覚悟が必要なのではないですか。

河合 僕は、自分がうまくなりたい

という人には、相手に話かけられて答える前に「ふーん」と言っていて、5秒間だけ待つように言っているんです。そうすると、相手もいろんな話をしてくれるようになりますよ。

形式から自由な発想が生まれる

河合 寅さんの映画で、さくらの息子が浪人中に、急に寅さんに親しみを感じて、何でも相談するようになる時期がありますよね。

山田 彼が幼い時は、なんの肩書きも権威もないバカなおじさんだと思っていたんですが、成長するに当たって、意外にこのおじさんは、オレにとって大事な存在だとわかってくる。浪人のころは親には言えないいろんな相談をするようになるわけですよ。

河合 やっぱ、浪人するということが大事なんじゃないですか。つらい人生体験をしたからこそ、寅さんの良さがわかるんです。

山田 そう意味では、日本人にとって、今のように苦しみと迷いの時代は、そんなに悪い時ではない、と思ってもいいのかもしれないですね。

河合 僕もそう思います。中年に起こる病の一つに「創造の病」(Creative illness)というのがあります。仕事いわずで来た人が、仕事を失ったときなどに起こるのですが、

心の病になる人もいるし、体の病気になる人もいます。

山田 むしろ自信満々だった人が自信を失ったときこそ、その人が人間として向上できる機会だと考えてもいい。

河合 そうなんです。そこでじっくり構えていると、全く違う世界が広がってくるのです。昨日まで相談に来て「死にたい」などと言っていた人が、ある日、映画を見て「こんなおもしろいものがあったのか」などと言いつつ。そうすると、しだいに仕事のほうもおもしろくなってきた。違う観点から見ることができるようになる。

夏目漱石は胃潰瘍になって死ぬ苦しみを味わった時から、作風がガラッと変わったと言われています。「創造の病」とは、生まれ変わるときの苦しみのようです。

そのように人が変わるチャンスとして、芸術は大きな役割を果たしてくれます。例えば短歌や俳句はいいです。ある程度のルールがあると、人間というのは自由な発想になれると思います。

山田 今はなんでもありの時代だから、否定するにも、否定すべき形式・秩序がないんです。小津安二郎の映画が世界的に評価が高いのは、頑固なまでにある形式を守っていた

かです。

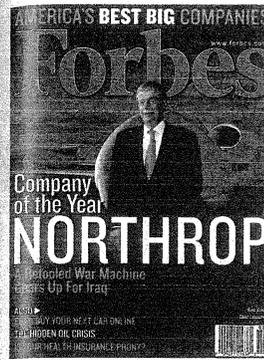
世界中の監督や批評家が集まって、10年ごとに世界の映画のトップテンを決めるイギリスの行事があるのですが、92年には小津さんの「東京物語」が第3位に、今年は第5位に選ばれました。ちなみに第10位に黒沢さんの「羅生門」が入っています。世界の映画100年の歴史の中で、日本人の作品がトップテンに2作選ばれていることは、大きな誇りですよ。

河合 中高年の心を癒してもらうためにも、これからの日本映画にぜひ期待したいですね。

(構成・二宮明子)

たそがれ清兵衛ストーリー

庄内の海坂藩の下級武士、井口清兵衛(真田広之)は、老母を養い、男手一つで娘2人を育てていた。仕事の終わるたそがれどき、同僚から酒に誘われても、いつも家に直行する。このため「たそがれ清兵衛」と陰口を言われていた。ある日、剣術の腕を見込まれた清兵衛は、藩に反逆して立てこもった男を切れ、と藩から命じられ、死地に向かうのだが…。



Forbes フォーブス 日本版

2003年 4月号
2003年 4月1日発行

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

April Issue (2003)

Date of issue : April 1, 2003

Publishing Firm : Gyosei Corporation

Headquarters : 7-4-12 Ginza Chuo-ku Tokyo 104-0061

Operating Office : 4-30-16 Ogikubo Suginami-ku Tokyo 167-8088

Japanese FORBES is published by Gyosei Corporation, Under a license agreement with Forbes Inc., 60 Fifth Avenue, New York, New York 10011

"FORBES", "FORBES Magazine", "No Guts, No Story" and "Capitalist Tool" are registered trademarks of Forbes Inc.

Copyright © Gyosei Corporation, 2003 All rights reserved. Portions are reprinted by permission of Forbes Inc., original Copyright (2003).

お問い合わせ先 販売 03 (5349) 6666

広告 03 (5349) 6657

編集 03 (5568) 0562

URL <http://www.gyosei.co.jp>

本誌の掲載記事・写真等の無断複写・複製・転載を禁じます。

印刷・製本 大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町 1-1-1

編集後記

今月号からのリニューアルに当たって、「たそがれ清兵衛」で注目を集めている映画監督の山田洋次氏と、心理学者であり文化庁長官でもある河合雄雄氏との対談を掲載した。

勤めの終わるたそがれ時、同僚から酒に誘われても、老母を養い、男手一つで娘2人を育てているため、いつも自宅に直行する。それゆえ「たそがれ清兵衛」と陰口をたたかれている。この一見さえない男が、無双の剣の使い手だった。

スクリーンからは、小藩の武士のつらさ、悲哀、ささやかな希望、秘めたる自負と勇気がふつふつと伝わる。家族を思いながら組織に生きる清兵衛に自らの心情を重ね、思わず涙する中高年ビジネスマン。

右肩上がりの高度成長からとめないデフレへの転落。今、40〜50代ビジネスマンは思いもよらなかつたパラダイムシフトの中で翻弄されている。片一端からつぶしてしまえば、新しいものが出てくる、創造的破壊だ。でも、えせシミュレーション理論では、決してデフレは根治できず、弱肉強食のアメリカ型社会になるだけ。

高度成長の時代には「知識」が時代にもてはやされた。今、中国がこれを見習っている。しかし、これからの日本は、豊かに生きる「知恵」を求めなければならぬ。山田・河合対談を通して、リニューアルのコンセプトを感じ取ってほしい。(小)